# ネソで括(くく)った松明担ぎ郷廻り

## 長浜市木之本町古橋(ふるはし)㉖

▲野神祭に参加した古橋の人たち

▶山の中でネソを採取して捻る

▶組み合わせた松明をネソで縛る

▲心棒を御神酒で清める

### ネソ採り

古橋は約120戸の集落。北出・東出・南出・西出・中小路・坂尻の6組で構成されており、毎年順繰りで野神祭を担っている。

古橋の野神祭はネソ採りから始まる。ネソとはマンサクの木のこと。マンサクの幹は、ねじると縄のよう柔らかくなり、乾燥するとよく締まる。そのため古橋では古くから松明(たいまつ)の結束材として使われているという。

今年のネソ採りは8月9日(日)。北出組の男衆が鶏足寺山へと向かった。松明作りに適したネソは直径5㎝、長さ約1・8mというが、手頃なサイズを見つけるのは容易ではない。

「山に入らんようになったさかい、良いネソが育たん。あと、何年できるやろ」

ネソは萌芽力が強く、伐採しても根元から新しい芽が生えてくる。だが、伐採の機会が減ると新陳代謝が起こらず、大木ばかりになってしまう。山に入って2時間半後、ようやくネソを抱えた男衆が下りてきた。

### 松明作り

松明作りの材料は、心棒となる12尺(約396㎝)の丸太とそれを覆う9尺(約297㎝)の麻木、上部が反った7本の雑木、そしてそれらを結束するための5本のネソだ。心棒となる丸太に麻木を巻き、その上に雑木を添え、均等に測った位置をネソで締め上げていく。

「6年に一度のことや、よぉ見とけ」「もっと、強ぉ締めなあかん」「はよ、木槌で叩け」。先輩の声が響く。若衆は声を頼りに身体で覚える。2時間後、松明が完成。突き出た雑木は害虫の触覚と足を象っているという。

やがて、〝大きな害虫〟は、若衆に担がれて、集落の中心にある馬場(ばんば)へと運ばれた。ここで火の見櫓に立てかけられ、1週間後の野神祭の本日を待つのである。

▲丘の上の野神に参拝

▲郷廻りの途中で松明を半分焼く

【日　時】8月16日(日) 13時30分
【場　所】馬場〜野神〜集落の南側一帯
【野　神】石碑
【参加者】その年の担当（北出組）の住民
【服　装】普段着
【お供え】夏野菜(トウモロコシ、キュウリ、ナス)、果物（ナシ、ミカン）、スルメ、昆布、御神酒、菓子(海苔巻き煎餅と焼き菓子)

▲松明を担いで山道を行く

▲最終地で松明を立てて愛宕踊りを唄う

（撮影／辻村耕司）

### 野神祭（郷廻り）

8月16日午後1時30分、北出組の人たちが馬場に集まってきた。この日は13戸から総勢20人ほどが参加。御幣（2人）、松明（担ぎ手6人）、鉦（2人）、太鼓（2人）、お供え（1人）に続き、墓地近くの「野大神」と彫られた石碑を目指して歩く。「郷廻りというんですよ」。側にいた婦人が教えてくれた。

石碑は村を見下ろす位置にある。両脇に御幣を立て、お供えをし、五穀豊穣を祈った後、林道の外れへと向かう。少し開けた場所で松明を下ろし、御神酒をかけ、ネソを頭から3本だけ鋸で切り外し、麻木部分に火をつける。半分ほど燃えたところで消火し、鉦や太鼓で囃しながら愛宕踊りの歌を唄う。

「松明を燃やすのは害虫退治。松明を持って歩くのは、みせしめみたいなもんかいな」。歌が終わると松明を担ぎ、再び郷廻り道を歩く。その距離、約1・6㎞。

「次は歩けんな。今年が歩き納めや」「ほんなこと言わんと、来年も一緒に歩きましょうや」。年配者の声に若いもんが応えている。

郷廻りの最終地は愛宕馬場と呼ばれている集落の東出。ここで再度、鉦と太鼓を鳴らしながら愛宕踊りの歌を唄う。

野神祭の終了は秋の収穫準備の合図でもある。この日から少しずつ夏の陽射しがやわらいでくる。（ひろ）

# 野の神さまたち

神さまの依り代はさまざまなかたちをしている
神さまは、どこかからそこへ降りてくるのか
いつからかずっと、そこにとどまっていたのか
御幣が捧げられると、その回りは厳かな空気に包まれる

（集落名の後の数字は地図番号）

▲石像（長浜市西浅井町野坂）⑳
八幡神社鳥居前に石像を祀る場所を野神さんとしている

▲▶ケヤキ・シイ（長浜市西浅井町塩津浜）㉒
地蔵の集積もあり、かつてここで盆踊りなどもおこなった

▲ケヤキ（長浜市余呉町下丹生）⑦

▲石（長浜市西浅井町祝山）㉑

▲塚（長浜市余呉町川並）⑯　字から集めた小石を積んでいる

▲石（長浜市余呉町下余呉）⑰

▲石（長浜市余呉町八戸）⑱　２本のケヤキの間の１ｍの石

▲石仏（長浜市余呉町坂口）⑲

▲石碑（長浜市木之本町赤尾）㊱　元は湧出山にあった

▲石（長浜市木之本町西山）㉞　四方の石柱で自然石を囲んでいる